

江東区千石ご出身の作家、宮部みゆきさんの作品を読んで

大興商事(株)

岩本 眞吾

小生(死語だね！若い人わかるかなあ、生ビールの小じゃないよ！)最近視力が衰え、あまつさえコロナ禍で通勤電車を避けているため経済紙などを読まなくなりました。今は小説・エッセイ・ライトノベルが楽しみです。

江東区出身の作家が何人いるのかは詳しく知りませんが、会社のある千石地区周辺でとなれば何といても宮部みゆきさんでしょう。

会社から徒歩5、6分のところにある深川四中出身ということで親しみを感じるわけですが、小説の中身は素人が語るのもなんですので本筋以外で おっ！とか ムフフ、、、とか感じる場面をご紹介します。してみたいと思います。

ざっと経歴を見てみましょう。1960年江東区千石生まれ。87年〈我らが隣人の犯罪〉でオール読物推理小説新人賞受賞。99年〈理由〉で直木賞受賞。〈火車〉〈模倣犯〉〈レベル7〉などの代表作があります。

有名なところでは〈淋しい狩人〉の舞台、南砂にある古書店「たなべ書店」でしょうか。私三十年以上も前、サラリーマン時代にそうとは知らずにぶらりと立ち寄り、本の整理が行き届いていて欲しい本が素早く探せることに感激しました。この店の主人イワさんと孫の稔が二人で事件を解決していくストーリーです。

十数年前に法人会の集まりで宮部さんが地元の方であり、先の書店が舞台の小説があることも併せて知り早速読んだことを覚えています。



たなべ書店



私が通っていた近くの支店



フジマート本店



フジマート3F

すると行きつけの食品スーパー、千田町の商店街に本店を構え、月島や品川区のムサコこと武蔵小山商店街にもお店があるフジマートの本店がスーパー「富士屋」とわかりやすい偽名で出てきました(新潮文庫 淋しい狩人 P119)。何故言い切れるのか、それは「三階にある貸しホールを借り切って、町内会の婦人部が新年会を開いたときにも、、、」というくだり。ここは地元の会合などによく使われており、私も法人会の集まりで店のお惣菜で作ったオードブルを肴にお酒を飲んだことがあります。

実在の店がほとんどそのままの固有名詞で登場しますので、この近辺にお住まいの方は是非お読みになっては如何でしょうか。

そしてこの本の初めには、「祖父に」と捧げられたことが記されており、きっとおじいさまの行きつけの店だったのかなあ、などと勝手に解釈しております。

そんな理由で宮部ワールドにすっかりはまってしまった私は、次に〈理由〉というやたらと分厚い上下2巻組を読破しました。物語の舞台は千住の高層マンションですが、森下の簡易旅館も重要な場面で顔を出します。

この本のストーリーは読んでいて様々な場面が展開されていく中で、徐々に核心に迫っていくという経験したことのないもので、とても面白かったです。

けっこう時代物も多く、〈本所深川ふしぎ草紙〉というお話は作者が最真にしている錦糸町の山田家という人形焼のお店の包み紙などにある 本所七不思議 から発想を得た様子。

そこには川柳本所七不思議として

おいてけ堀 置いてけと云わぬ内から置いてゆき
津軽の太鼓 雷に聞かすか津軽空で鳴る
片葉の芦 両国に片葉の芦のなびくなり
送り提灯 かけ足でぬけても提灯前にある
ばかばやし 馬鹿ばやし馬鹿な面して耳を立



山田家の添付文書

落葉なし椎 椎の葉に小物一人は食いはぐれ
消えず行灯 しわいやつあの行灯がほしいなり
と記されております。

山田家さんの餡は上品な甘さで、いくつでも食べられてしまいそう。タヌキ形の人形焼きも人気だとか。おっと甘いものには目がないのでつつい脱線してしまいます。

時代小説の〈ぼんくら〉シリーズでも深川界限はよく出てきます。

珍しいエッセイ本、〈ほのぼのお散歩日記〉（注：旧平成お散歩日記の令和元年書下ろし番外編を加えた新装完全版）では江戸物、捕物帳やら市井物を小説に書く際A地点からB地点まで町娘の足でどれくらいかかるのか、男性だとどうか、赤穂浪士ならば本所の吉良邸から泉岳寺までどれくらい歩いたのか、ということを実際に確かめる目的もあり、散歩を中心に時には現代の早駕籠ともいうべきタクシーなどを使いあちこち尋ねまわるというお話。

箱根はさすがに小田原まで電車とか、全行程散歩は体力的にも日程的にも無理な様子。平坦な道と山坂道では体力的にかなり差がありますしねえ。

私の自宅は大田区の池上線沿線。会社のある江東区千石までは約20キロ。防災の日にどこまで歩けるか、と朝5時過ぎに自宅を出ててくと歩いたことがあります、いかんせん港区の高輪あたりまでは坂が多い。7キロ地点の五反田でへばってしまいます。武蔵野台地の一画 久が原台、半端ないです。

話をもどすと江東区や墨田区界限が良く出てくるので結構面白いエッセイです。前出のおいてけ堀、錦糸町界限も巡ります。

番外編の「剣客商売『浮沈』の深川を歩く」では、門前仲町を出発して冬木町辺りの材木屋さんの前で記念写真、洲崎神社、宇迦神社、閻魔堂、今はなき名店伊せ菰などを訪ね歩きます。

それと本書では宮部先生、箱根や皇居は初めてとか、飛行機が嫌いとか、意外な面を覗かせます。

如何でしょう、ほんのさわりをご紹介しただけですが、宮部作品には深川界限がやたらと登場します。小説中に深川の実際にある店がほかにもありましたら是非教えていただきたいものです。

興味をもっていただければ幸いです。